特集
つながりの原点
「家族」を問う

テレビドラマの脚本と「家族」への思い

田渕 久美子
Interview with Kumiko Tabuchi
脚本家

「家族」をしっかりつかまなければ人物は描けない

NHKの大河ドラマ「篤姫」以降、私は「家族」を描く脚本家だとよく言われます。私自身はそれを意識したことはありませんが、ドラマを織りなす登場人物たちを描こうとするとき、その人は、どんな環境や人間関係の中で育って来たのかを常に念頭に置いているのは確かなことです。それを脚本として表に出すのか出さないのかは、作品ごとに違いがあるにしても、ある人物を深く掘り下げたいと思うのなら、そのベースとなる部分、その人の家族の背景を私自身の中でしっかりと捉えていなければならないのは、当然のことだと考えています。

篤姫は、後に自分の実家である薩摩が、嫁ぎ先の徳川家に攻めてくることになるという数奇な運命を生きた人です。もともと残されている資料が乏しい人ですが、ドラマの面白みを考えると、薩摩時代の篤姫と家族、そこで慈しみ育てられた篤姫と、その愛情の深さをきちんと描いておかないと、嫁いでからの篤姫の存在に奥行きが生まれないと当初から考えていました。そこから今度は、徳川の「家」ではなく、「家族」を描くという思いにつながっていったのです。

また、NHK朝のテレビ小説「さくら」は、家族が見る朝の時間帯の連続ドラマでした。主人公のさくらはハワイで生まれ育った日系3世で、何でも思っていることは口にし、問題があったら、それを解決しなければ気が済まない女性です。そういう、いかにもアメリカ人のさくらと、これまでさまざまな問題はうやむやにしてやってきた日本の家族。文化のギャップが大きい両者の出会いにより、それぞれの家族がどう変わっていくのか。そういう姿を描くこともこの連続ドラマのテーマのひとつでした。

ここに描かれているいくつかの家族は、もちろんそれぞれに異なるのですが、みんな愛すべき家族。おそらく、ご覧になる人たちが希求してやまない家族の姿だったと思います。もめたりぶつかったりすることがあったとしても、最後には気持ちがつながります。それぞれの人にとっての心のふるさとである人間の関係を描くことで物語の世界が深まっていきました。

実際、私自身も、そういう家族の中で成長してきました。家族があったからこそ私が今ここにあるし、私もまた新しく家族をつくり、今の私があると実感しています。

誰もがひとりで生きていけるわけではなく、その人ごとにベースである家族の存在が欠かせません。実際には、そこには嫌なことや煩わしいことも数えきれないほどあります。だからこそ、視聴者の方もドラマの中では理想の姿を見たいという思いがあるのではないでしょうか。これは恋愛も同じ。理想とする恋愛のありようを見たい。私は、もしかしたらそういうものを描いているのではないかという気がします。

今生きている私と子どもたちとの関係だったり、過去の別れた夫や、再婚してその後にがんで失った夫との関係だったりと、実際は辛いことも数多くありましたが、私の理想とする私らしい家族の関係を、これまでつくってきたという気持ちはしっかりとあります。そうした思いの幾分かを、必要に応じてですが、ドラマにものせてきました。

時代によって家族の形態は大きく違っても、その根っこのところはおそらくは変わらない。大家族だったり核家族だったりしても、その家族を形成するのは一人ひとり。一人の人間の個性や持っているものを共に生かし合うことをベースにしてつながっていれば、家族というものは基本的にはうまくいくものだと思っています。

家族はふるさとであると同時に第一の社会

そういった意味でも、私にとって最初の「家族」というのは、まず自分自身です。自分とどう付き合っていくのかが最重要。自分を信頼し、愛することが大切です。そのつながりがうまくいっている人は、最初に出会う自分の外の人間、つまり家族に対しても否定からではなく、まず肯定からスタートすることができるでしょう。

私は自分の子どもを育てる上でも、家族は常に社会に出て行くための最初の練習の場であると思い、子どもたちにもそう伝え、接してきました。家族は、何があっても最後にはあたたかく迎えてくれるふるさとであると同時に、第一の社会でもある。これは、私の母に教えられたことでもあります。

私は兄と弟に挟まれた長女で、母はかなり厳しく私にのぞんだと思います。

今でも思い出すのは、子どもの頃、学校で嫌なことがあって家でブスッとしていたら、母に「何をそんなに不満そうにしているの！」と叱られたこと。「学校で…」と言いかけたら、「相談ならいいけれど、ここは家族というひとつの社会なのだから、面白くない気分をそのままに出されると迷惑です」と、ぴしゃり。家族というのはぬくぬくしているところに見えて、実はそうそう甘いところでもない。今後、世の中を生きていくため、他の人たちとつながっていくための「学びの場」でもあるのだと思い知らされました。

親となった日から、子どもに最低限の「人としてのマナー」を教えるのは当然のことだと思います。でも、それが難しいと感じたら無理をせず、祖父母や身近な年長の人たちの力と経験を借りるべきでしょう。親の役割だなどと狭くとらえ、ガチガチになる必要はありません。

まず、家族を持てたこと、産んでもらって自分が今ここにいることも大変な幸運。そのことへの「感謝」と「覚悟」があれば人間関係もうまくいく。私はそう信じています。

篤姫の時代で言うと、「家族」については、まず「家」という概念が先にあって、それを構成する人間たちがいるという考えが普通でした。それに対し、私は個を大切にし、その人たちが集まってできたものが「家族」だという発想で物語を描いたのです。それによって今を生きる人たちにも分かりやすいドラマになったと思います。「家族」という言葉も、あの時代にはなかった言葉ではないかと当初は思ったのですが、幸いなことに、時代考証の先生方からのだめ出しもありませんでした。結局、時の将軍までが「家族」という言葉を使うという、かなり現代風にも見える歴史物だったと言えるかもしれませんね。

今取り組んでいる来年のＮＨＫ大河ドラマは、それから３００年近く昔へさかのぼります。主人公の江（ごう）は、織田信長の妹お市と浅井長政の間に生まれた三姉妹の末娘。淀君の妹であり、後に二代将軍徳川秀忠の正室となる女性でした。戦国と言われるこの時代でも、血なまぐさい戦だけでなく、やはり家族の愛情がなければ足もとは定まらないはず。だから、江の父・長政と母・お市の方の間には深い情愛があり、三姉妹も豊かな愛に育まれたのだろうと考えました。ただ、戦で早くに父を亡くした江には父の記憶がありませんでした。江の人生は自分の中の父探しであり、また幼い自分たちをおいて先に死んでいった母なる人を求めることだったのかもしれません。さまざまな人たちとの出会いの中で、最後にどういうところに行き着くのか、どのような「家族」を彼女がつくろうとするのかを、ドラマの中でうまく描き出せれば、と考えています。

歴史上の人物、特に女性たちは、思うに任せない人生を生きた人が多いと思います。そんな中で、おのれの意思を貫いた「覚悟」ある生き方を「篤姫」に次ぐ「江」でも描いていきたいと思っています。そうした彼女たちの生き方が、今を生きる方たちの勇気や力につながれば、これほど嬉しいことはありません。

どうなるか分からない、だから家族は面白い

私の元夫のお母さんとは、今も彼女が時々訪ねてきて、時には我が家に泊まっていくような間柄です。私が別の人と再婚した後でもそうした関係は続いてきました。彼女が孫たちに会いたいというのは当然の思いですし、個人としても大好きな人です。彼女は元姑ですが、今は私にとってもうひとりの母。私は、その母の喜びの一端になりたいと思っています。

生活単位としての家族だけでなく、外の世界とどうつながっていくのか。小さな単位としての家族にこだわりすぎる必要もない。私は子どもと3人の暮らしですが、子どもが2人とも巣立っていった時には、またひとりで生きていくことになります。誰かと生きていきたいと思うならそうするかもしれないし、もしかしたら、もっと違う形を選ぶかもしれません。私に限らず、これからの世の中には、きっと血のつながりや家といったようなものにしばられない関係がさまざまに出てくることでしょう。

そのとき、つながりの基本はやはり「愛情」です。遠くにいても、愛情があれば家族。息子が留学することになり、これからは娘と2人だけの暮らしになります。それでも、遠く離れた場所で息子が生きて、成長していく。そうと思うと、寂しさはあっても喜びは大きい。息子の身になれば、何が起きても苦労をしても、すべては宝です。「相手の身になる」こともまた愛情の証のひとつなのかもしれません。

自分自身を大事にするところから絆が生まれる。そして家族という絆を大事にすることが、外への愛情を広げていく。そしてそのつながりは消えることはないと思うのです。CEL

（本稿は、田渕久美子さんへのインタビューに基づいて編集室にて構成したものです。）

田渕　久美子（たぶち・くみこ）

脚本家。1959年島根県生まれ。85年にデビュー。代表作は、橋田賞受賞のＮＨＫ朝の連続テレビ小説「さくら」、ＮＨＫ大河ドラマ「篤姫」など。前向きに生きる女性たちの姿を豊かな表現で描き、視聴者から深い共感を得ている。ドラマ以外にも、映画・ミュージカル・落語・演劇・狂言など幅広い分野で精力的に執筆活動を展開。2011年の大河ドラマ「江（ごう）～姫たちの戦国」も執筆中。著書に、『江～姫たちの戦国（上・下）』、『女の道は一本道』ほか。